

## 東京五輪物語

1964 - 2014 - 2020

## 朝霞のライフル射撃場

## 観客も倒れた大音響

1964年10月15日午前9時、埼玉・朝霞のオリンピックライフル射撃場は快晴だった。18カ国の30人が300発先の標的をめがけ一斉に撃ち始めた。同志社大射撃部の3年生で、大会の運営を手伝った平瀬絃一さん(72)はいまも、あの音が耳に残る。「大砲をぶっ放したような、鼓膜が破れるような強烈な音だった」。発射音に驚いた観客の子どもたちが倒れ、救急車を呼ぶほどだったという。

フリーライフル3姿勢は、6時間半かけて、伏射、膝射、立射と変えながら、計120発を撃つ。米国の25歳、ゲリー・アンダーソンが世界記録で制した。平瀬さんが話しかけると、練習法や最新鋭の道具について教えてくれた。同大の先輩、綿貫甫は28位に終わった。

終戦から20年足らず。日米の



②ライフル射撃を見物する観客たち③フリーライフル3姿勢で優勝した米国のゲリー・アンダーソン=1964年10月14日(競技前日に撮影)

力の差は歴然だったが、観客はみな、拍手を送った。平瀬さんは射撃界に語り継がれる「名言」を思う。「銃は危険な武器でも、賢明に使えばスポーツができる」。そして、うれしかった。「世界中の人たちと関わった。これで、国際社会の一員になれた」。射撃場はいまも、陸上自衛隊朝霞駐屯地にある。朽ちた木柱やさびた鉄骨が、あの日の面影を伝えている。300発先の標的の跡へ真つすぐ続く道は、アスファルトで舗装された。

74歳になったアンダーソンは、国際射撃連盟の副会長を務める。昨年、若い選手へ向けた教本を著し、海外を飛び回る。「あの素晴らしい大会を開いた東京が、再び成功させることを確信している」。同じ駐屯地で開かれる6年後、教え子の活躍を夢見る。

(木村健一)

